

オーストラリアにおける多文化教育と社会

香川県立観音寺第一高等学校

普通科 3 年 岸本 ひなた

オーストラリアはかつてイギリスの植民地であり、長らく「白豪主義」と呼ばれる政策をとり、主にヨーロッパ系移民を受け入れてきました。この政策は、他の地域からの移民を制限し、国の文化や人口構成をヨーロッパ系中心に維持することを目的としていました。しかし 1970 年代になると、南欧や東欧からの移民を受け入れるようになり、社会は徐々に多文化主義へと移行しました。1980 年代以降は、アジア、中東、アフリカからの移民も増加し、オーストラリア社会はより多様な文化背景を持つ人々で構成されるようになりました。この変化は教育や法制度、地域活動など社会のあらゆる場面に反映されています。

学校での多文化教育

オーストラリアの学校では、多文化や多様性を学ぶ授業が積極的に行われています。たとえば、「オーストラリア社会の理解」や「多文化・障がい・言語の違いを理解する授業」があります。こうした授業では、異なる文化や宗教、生活習慣について学び、互いの違いを尊重する姿勢を育てます。また先住民オーストラリア人の教育格差を解消する

「Closing the Gap（ギャップ解消）」というカリキュラムも実施されており、就職率や学歴、収入水準の改善を目的に取り組まれています。さらに、地域で話される主要言語を学ぶ授業も行われており、従来のフランス語やイタリア語に加え、家庭で話される中国語やパンジャブ語なども取り入れられ、母国語や文化の尊重が行われています。このように、学校教育は多文化共生を学ぶ重要な場となっており、子どもたちが将来異文化社会で活躍する基礎を築いています。

地域社会での取り組み

地域レベルでも、多文化主義は積極的に推進されています。市のカウンスルは文化フェスティバルやイベントの開催を支援し、文化団体はイタリア祭やギリシャ祭、ラテン祭などを開催しています。これらのイベントでは、料理や音楽、芸術を通して多文化を体験することができ、地域住民同士の交流も促進されます。また、移民や新住民向けには成人や学生を対象とした無料の英語クラスが提供され、EAL/D（English as an Additional Language/Dialect）授業として学校でも活用されています。これにより、地域社会全体で多文化理解が進められ、誰もが参加できる社会づくりが行われています。

日常生活での多文化交流

オーストラリアでは日常生活の中でも多文化が自然に体験できます。職場や学校では、ラマダンに合わせて料理を持ち寄ったり、異文化の祝日や行事を共有したりすることがあります。ホバートなどの都市ではネパール料理、ギリシャ料理、フランス料理、イタリア料理など多くの国の料理が提供され、地域イベントでは音楽やアートを通して異文化に触

れる機会も豊富です。また、日常生活の中で友人や同僚と文化や宗教について話すことも多く、こうした交流が自然な学びの場となっています。

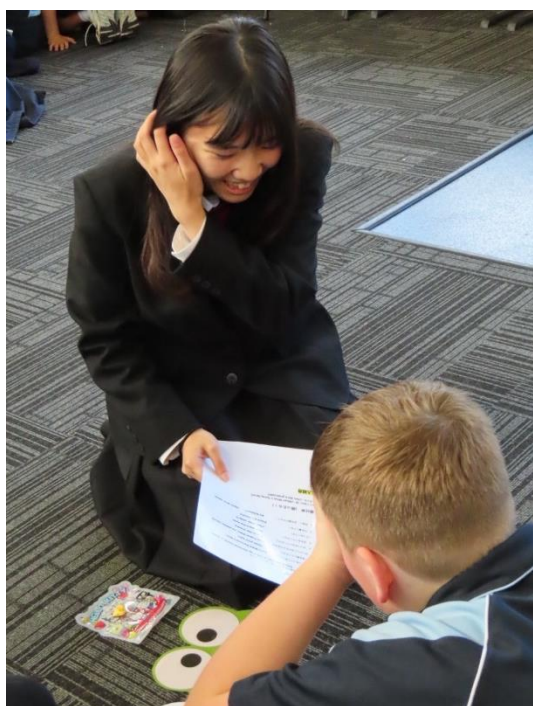
言語と人口統計

2021 年の統計では、家庭で英語以外を使用する人は約 28%（約 750 万人）で、過去より増加傾向にあります。主要な言語は中国語（マンダリン）、アラビア語、ベトナム語、広東語、パンジャブ語で、特にパンジャブ語は 2016 年から 80%以上増加しました。また、オーストラリア人口の約 27.6%は海外で生まれており、イギリス、インド、中国、ニュージーランド出身者が多くを占めています。さらに出自に関しても 300 以上の異なる背景が報告され、英語圏出身者に加え、中国系やインド系などアジア出身者の割合も増加しています。こうした多様性は、家庭や地域、学校教育の言語や文化に反映されており、多文化共生の基盤を支えています。

まとめ

オーストラリアでは、学校教育、地域のイベント、日常生活を通して、多文化共生が自然に育まれています。歴史的には白豪主義から多文化主義へと移行し、現在は教育、法制度、地域活動、日常の体験すべてが、異文化理解や共生の学びにつながっています。政策や教育だけでなく、日々の生活の中でも、多文化社会としての意識が浸透しており、オーストラリアの多様性は今後も広がっていくと考えられます。このように、オーストラリアの取り組みは、異なる文化や背景を持つ人々が共に生活し、学び合う社会をつくるための具体的なモデルとして参考になります。

（出典）Australian Bureau of Statistics、ウィキペディア、ホバート副市長とホストファミリーの取材より



▲8月7日 ワイメア小学校で福笑いを披露